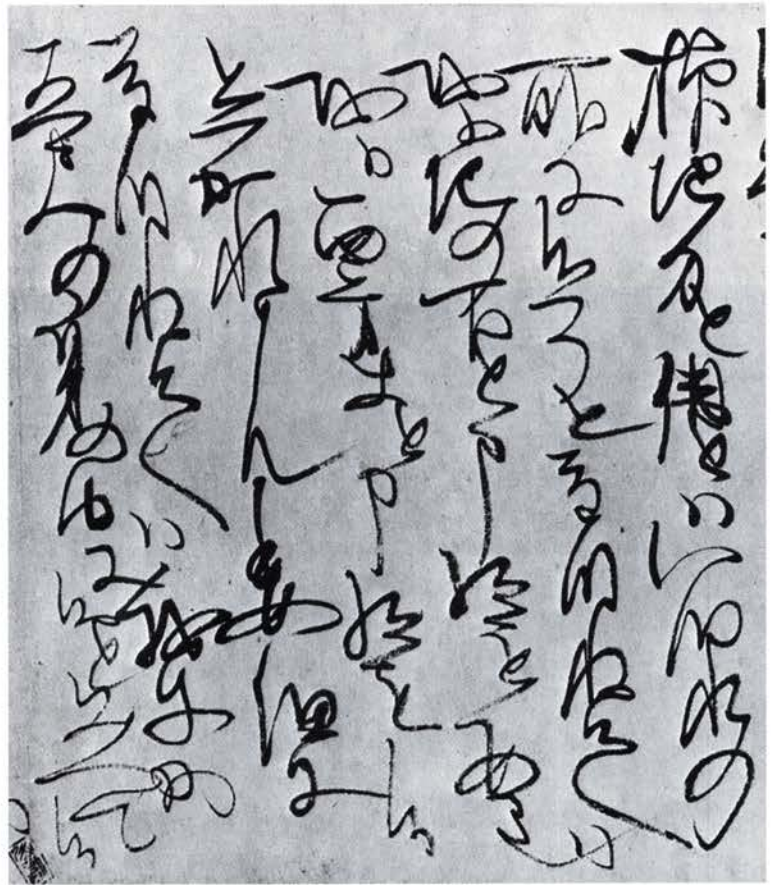




今月の御聖訓



抑地獄と仏とはいづれの所に候ぞとたづね候へば、或は地の下と申ス経もあり、或は西方等と申ス経も候。しかれども委細にたづね候へば、我等が五尺の身の内に候とみへて候。

【重須殿女房御返事 全集一四九一頁】

目次

今月の御聖訓	
卷頭言	菅野憲道 1
【御書】「『観心本尊抄』その二 一念三千について」	菅野憲道 2
御書と日興上人〔196〕	松田銘道 6
【寄稿】『日蓮遺文解題集成』発刊余話〈その三〉	山上弘道 8
【採過拾新録】「かくれた大蔵書家、清野謙次博士」	13
【所感】「大久保利通の顕彰碑に思う」	森 秀之 17
【應】	20
四月の行事 卯月詠草 恵日俳壇	

巻頭言

お大事に

菅野 憲道

近頃、到来した手紙を拝見すると、文末に、「くれぐれもお身体大切に……」と書かれていることが多い。丁寧で心の籠もった筆跡から伝わって来るお心からは、有り難くもあり、ご心配をお掛けして申し分けないという気持ちも交錯する。

もとより時間を無駄に過ごすのが嫌いで、何かと用事をしていないと気が済まないタイプの人間だから、電車、自動車の移動時間はまだしも、病院や調剤薬局の待ち時間は体に良くない。勿論評判の食事処の行列などんでもない。極め付きは家内の買い物のお供。最後の買い物は記憶も定かでは無いが四十年位已前、何か行事の用意でデパートに行くことと相なったが、付いていって十分もせぬうち、音をあげる。買う気もないのに目につくもの何でも手に取っての品定め、全フロアー見て回るつもりか、勘弁してよというわけで、一時間半後の待ち合わせを約して別行動、個展会や文具売り場を見ても時間は余り階段の踊り場で文庫本を読んで過ごすハメになった。結局家内の買い物はといえば、御座候と今晚のオカズ。目的の品物は気に入ったものはなかったとか、よくある話。

ところで、「お身体を大切に」ということはどういふことだろうと考えた。お身体を大切にすることとは、健康に気を付けて長生きしてくださいというような意味かと思うが、長生きしたばかりに災難にあつたり、独りぼっちになったり、何かがあるかは分からない。ひと頃、停年退職した夫をぬれ落ち葉と揶揄して早死にしてもらおう方法などと、冗談めいた話かはやったことがあつた。何でも、毎日ご馳走を食べさせ、運動や家事もさせないで、高血圧や糖尿病で早死にして頂く方法だそうだ。何もしないで美術品のように大事にかざって置けば、生きた人間だもの逆に寿命を縮めることになる。長生きして貰いたいならあまり大事にしないほうが良いとはよく聴くこと。自分を大切に思うなら、自分を愛しすぎないほうが良い。我慢偏執の心は己を甘やかすばかりで還って自分を損なうことになる。

もつとも無為徒食して馬齢を重ね、空しく一生を終えることこそ、最も戒めなければならぬ。



お講話(要旨)

拝読御書 「観心本尊抄」(全集 二三八頁)

「観心本尊抄」(その二) 一念三千について

菅野 憲道

《「摩訶止観」の一念三千》

先月と先々月は、「観心本尊抄」の題号の読み方と、一念三千の「一」に二つの意味があることをお話しましたが、その次に、大聖人は、

「摩訶止観第五に云く、(世間と如是と一なり、開合の異なり)『夫れ一心に十法界を具す。一法界に又十法界を具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば百法界に即ち三千種の世間を具す。此の三千、一念の心に在り。若し心無くんば已みなん。介爾も心有れば即ち三千を具す。乃至、所以に称して不可思議境と為す、意此に在り』」等云云。」

(全集二三八頁)

と、冒頭に「摩訶止観」の有名な一念三千の依文を挙げられます。今日はその一念三千についてお話したいと思います。

今から約千四五十年前、日本に初めて仏教が伝来してきた頃、南北朝・隋の頃の中国には、インドからすでに多種多様な經典が渡って来ており、それぞれが拠り処とするお経に基づい

て宗派が立てられるような時代に、統一性もなくバラバラに仏教を奉じていたものを、天台大師が一切経を読まれた中で、四教五時と四つ四つの説教方法と、華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃という五つの説教をベースに一切経全体を体系化されて、法華経を頂点とする教判を立てられたのです。

教判とは、教相判釈のことで、お経の説かれた内容等によって仏教全体の中でどういう役割を持っているかを判定し位置づけしたもので、その基本になっているのが「華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃」の五つ時期による分類です。

そのうえで、御一代のライフワークとして「法華玄義」、「法華文句」、そして「摩訶止観」と、三大部の講述が行われ、弟子の章安大師が筆録されたのです。これらは「玄」「文」「止」と略称し、各十巻二十冊に編集されております。

それから百年後には妙楽大師が出て三大部の注解、すなわち「法華玄義釈籤」「法華文句記」「摩訶止観輔行伝弘決」を著しまして天台法華宗はおおいに興隆しました。これも各十巻二十冊で構成されております。都合六十巻百二十冊です。

「摩訶止観」は書名の通り観心や禅定の修行をもって実践する指南書です。（摩訶ニマハーニ大）、思弁哲学的な一念三千の観念観法を用いて、二十五方便という念仏や観念によって修行に入る準備の方法を説かれたのです。

ただし、天台大師の法門は述門主体で、像法過時の立場ですから、本門主義の私どもが「玄義」「文句」はともかく、修行書の「摩訶止観」を用いる事はないのですが、諸法実相の理を学ぶ上においては一部有用な意味を持つておりますから、日蓮大聖人やその門下の修学シーン、大師講や談林などで部分的に読まれていたようです。

「夫れ一心に十法界を具す。一法界に又十法界を具すれば百法界なり」（同）

と、まず地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏の十界、私どもが果報として受ける境遇について十種の世間を標示しております。これは地獄・餓鬼・畜生……という世界が存在するという意味ではなく、日々自分が住む世界を人は様々に感ずるのですが、その経験的感受作用を十種の世界に分類したものです。したがって、天界がたちまち修羅



大石寺（富士学林）刊行の六大部の影印本

界に変わってしまふようなことは、人の心が変わっただけで、少しも珍しいことではないのです。

もともとは十界論は華嚴経に説かれております。しかし互具までは説かれていません。「一即一切」とか、「心如工画師

種々造五蘊」などの華嚴経文が引用されますが、インドラ網の譬えが示すように、時空を超越した仏の世界の壮大さは説かれてはおりますが、やはり法華経の二乗作仏・久遠実成の説には及ばない。十界論を説くと雖も、互具思想は無いから、衆生成仏の道もありません。

法華経は十界互具・百界から千如是・三世間と森羅万象の法界全体はそのままわれらの色心そのものであると説くのです。そこで、どういう状態にあるかがわかるのです。日蓮大聖人は、

「夫れ浄土と云ふも地獄と云ふも外には候はず。ただ我等がむ

ねの間にあり」（全集一五〇四頁）

と表現されていますが、もともと地獄とか浄土は周りの環境としてあるのではなく、自分の命の中に、自分の心の中にあるのです。

十法界とは「夫れ一心に十法界を具す」、つまり我われの瞬間瞬間の命の中に実は一界だけではなくて、十法界全体を具えているというのです。どういふ命が出てくるかは、その表面上に出てきた命と、冥伏されている命は、ちょうど心を沼とか池に例えれば、池の底に沈んで普段は全然見えないものが、何かがきっかけで、そこからいろんな命がふつふつと出てくるような、あるいは波風が立つと、一気にそれが濁って出てくるというようなあり方になるのだと思います。

《一念三千の重要性》

ところでなぜ、その一念三千が重要視されるのかですが、一念三千とは、人の一念に三千世界の因縁と関係性を有しているという法門で、われわれ凡夫が日常起こすところの様々な想念、一瞬一瞬のうちには浮かんで消えるようなおぼろげな心にも、三千の数で現わされた法界（宇宙全体の森羅万象、すがた）がすべて具わっているという見方のことです。

天台大師（智顛）は「摩訶止観」（五卷上）で、

「心は是れ一切の法、一切の法は是れ心」

と、法界はミクロ（極小）の一念の世界と、マクロ（極大）の三千の世界が、相即し、渾然一体となつていふことを表わしていると言明されています。（余談ながら、この一即一切の話はi P S万能細胞や、探査衛星はやブサ2がりゅうぐうから塵を採取して来たことを連想します。また世界はマクロの宇宙物理学の対象とミクロの原子物理学の対象が人間の心で渾然一体となつて動的平衡にあることが興味ぶかく思われま



天台大師

すなわち、われわれの日常的に変化する心の有り様にも、三千の数に表現された現象の諸相がそのまま一念に具わつていて、一念は迷っている者、悟つている者を含めたすべての境地である百界となり、その百界は実相の十種の面（十如是）を具えているから千との境地（衆生世間）と、さらに人間がよつて住む場や環境（国土世間）と、人間の存在を構成する要素（五陰世間）との三種の世間にわたっていますから三千の数となり、この三千で一切



章安大師

の現象を表現させています。

また、三千とは数量の意味ではなく、一切の諸法を具えてい
るとの意味を表すものですから、「一色一香無非中道」や「色
心不二」の教説を併せて鑑みれば、一色三千でも一香三千でも
同じことになります。しかし、妙法を感得する修行法としての
一念三千は、理法の一礫三千や一香三千ではなく、一念信解の
受持行は一念三千の妙法に限られるのです。

・「いのち已に一念に過ぎざれば……」（「持妙法華問答抄」）
・「毘盧の身土は凡下の一念を逾えず」（「諸法実相抄」）

・「金鉉論に云く「乃ち是れ一草・一木・一礫・一塵、各一仏性・
各一因果あり、縁了を具足す」（「観心本尊抄」）

・「譬へば如意宝珠の玉に万の宝を収めたるが如し。一塵に三
千を尽くす法門是れなり。」（「内房女房御返事」）

天台の場合、これを自己の体験として瞑想によって体得する
ことを観法の極致としますが、大聖人は末法における事の一念
三千の法体・五字七字の妙法蓮華経をば法華本門の寿量文底よ
り拾い出だされ、この五字七字の妙法蓮華経の行者の一念信の
世界を具象化したものが十界曼荼羅であり、この人法一箇の本
尊を受持して信行口唱することが末法相應の行法であると説か
れたのです。

妙楽大師も「弘決」において、これを、

「当知身土一念三千（まさしに知るべし、身土一念の三千な
り）」

私たちのこの身も、あるいは抛って立つ大地や自然も、衆生
世間も、すべてそれは一念三千の妙法そのものです。それゆえ
に、

「故成道時称此本理（故に、成道の時、この本理にかなう
て）一心一念法界に遍しと釈せり」

と仰せで、自分のささいな一念さえ、本当は宇宙大の関係性を
持つている、それどころか宇宙法界の広がりそのものが我われ
の命ということ、その因縁はそう簡単になくなりはしません。
それで我われが南無妙法蓮華経とお題目を唱えるのです。

ですから、南無妙法蓮華経と唱えた時には、自分の自我は妙
法蓮華経に帰命して、全く妙法蓮華経の当体そのものになって
いるというのが大聖人の立てられた修行方法で、我われが南無
妙法蓮華経と団体であるということ、これが一念三千の法門
の一番肝要な部分になっていて、自我意識から妙法蓮華経の命
に転換していく、自我意識をコントロールしてより良い方向へ
変化させていく、事の一念三千の妙法蓮華経への信を確立した
ところから起こってくる大きな変化は、まず六根清浄の功德に
なって、自分が変われば世界が変わるということが現実此起こ
ってくると思うのです。

何度も我が身に当てて信行に励んでいく時に、何となくそこ
に一念三千とは単なる数字ではなく、この法界全体が自分の住
まいであり、道場であり、仏の住まいする世界であることが分
かってきて、自然に、虚栄心や物欲も失せ、死の恐怖とか貧病
争から起こってくる苦悩といったものも薄らいで、本当の安心
立命の境地も生まれてくるかと思えます。

ますますのご精進をお願いする次第です。

南無妙法蓮華経

（了）

〔御書と日興上人（一九六）〕

「立正安国論」書写と「安国論問答」（一三〇）

松田 銘道

前回は、大黒喜道師の「宗祖」一代における妙法五字の内容的な変容について

（『興風』三〇号）との論文では、「妙法五字の内実」について従来とは異なる検証を示していることについてみてきました。引き続き同師の論文についてみていきます。

同論文の「一、宗祖の生涯を貫く妙法五字流布の確認」との項目では、『諫曉八幡抄』の「今、日蓮は去ぬる建長五年（癸丑）四月二十八日より、今弘安三年（太歳庚辰）十二月にいたるまで二十八年が間、又他事なし。只妙法蓮華経の七字五字を日本国は一切衆生の口に入れんと励むなり。此れ即ち母の赤子の口に入れんとはげむ慈悲なり」とのご文について、

「宗祖は千葉・清澄寺における建長五年（一一二五三）のいわゆる宗旨建立および

立教開宗の際に、宗祖は一体どのような事を集まった僧俗の人々に訴えられたのか、それを知りたいと思ひ、確かな御書に検索をかけてみたのであるが、あまりはつきりした結果を得ることは出来なかつた。……そんな中で眼に着いたのがこの『諫曉八幡抄』の一文である。これは一統了解されるように、とりわけ法華経の題目を二十八年間、終始一貫して日本国の人々に勧めて来たというご文であるが、たとえば建治二年の「松野殿御消息」にも日蓮は建長五年の夏以来、南無妙法蓮華経の題目を唱えてきたと言われているので、およそ私たちは建長五年の立教開宗以降、おそらく弘安五年十月に帰寂されるまで、宗祖は一貫して南無妙法蓮華経の題目を唱えるよう、有縁の人

々に説き勧められたと理解してよろしいかと思われる。ただし、その場合、その妙法五字の題目の内実と言うか、その中味は建長五年から弘安五年までの二十九年間、全く変わることも無く一緒だったのか、それとも外見の形は同じ題目ではあつても、その内実はさまざまに変わつていったのだろうか、その辺りのことを知りたいと思ひ、自分なりに考えてみたのが今回の論題を撰んだキツカケである。それに対して、私自身としてはその内容はさまざまに変容して行つただろうという立場を取るものであることを、最初にお断りして置きたい。」

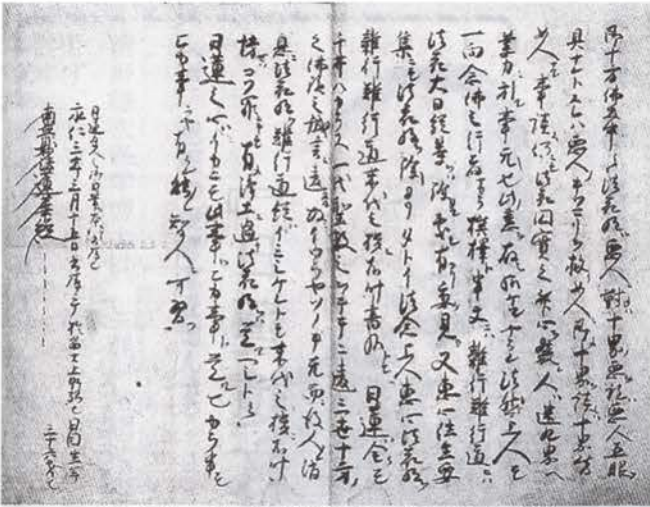
との見解を示しています。すなわち、『諫曉八幡抄』や『松野殿御消息』（建治二年「一一二七〇」二月七日）の「南無妙法蓮華経と唱ふる人は日本国に一人も無し。日蓮始めて建長五年夏の始めより二十余年が間云云」とのご文から、「宗祖は一貫して南無妙法蓮華経の題目を唱えるよう、有縁の人々に説き勧められた」ことが知れるものの、はたして「妙法五字の内実」は、
①一貫して「全く変わることも無く一緒だつ

たのか。

②「外見の形は同じ題目ではあっても、その内実はずさまに変わっていったのかとの二意を示し、②と規定しています。

②と規定する根拠については、「二、最初期の内実を付度する」との項目を設け、宗祖が「人々に勸説され」た「妙法五字の内実」について、次の三書から検証していただきます。

①『一代聖教大意』（正嘉二年（一一二五年）二月十四日）



「日日本」『一代聖教大意』（保田妙本寺藏）

ご真蹟は現存しないが、「日蓮聖人之御自筆ノ本ニテ書写也。永仁三年三月十五日書写畢、於富士上野郷也、日日生年三十六歳也」との奥書から、永仁三年（一一二九）には「御自筆（真蹟）」が大石寺に現存していたことが知れる。

「妙とは天台の玄義に云く……『秘密の奥蔵を発く、之れを称して妙と為す』。

……今の妙法とは、此等の十界を互ひに具すと説く時、妙法と申す。……絶待妙の意は、一代聖教は即ち法華経なりと開會す。」

②『唱法華題目抄』（文応元年（一一二六〇）五月二十八日）

「法華経の肝心たる方便・寿量の一念三千・久遠実成の法門は、妙法の二字におさまれり。……一切の諸仏・菩薩・十界の因果・十方の草木瓦礫等、妙法の二字にあらざると云ふ事なし。

……諸仏諸経の題目は法華経の所開なり、妙法は能開なりとしりて法華経の題目を唱ふべし。」

③『法華経題目抄』（文永三年（一一二六）一月六日）

「妙法蓮華経の五字も亦復是の如し。一切の九界の衆生並びに仏界を納めたり。十界を納むれば亦十界の依報の国土を収む。……妙と申す事は開」と云ふ事なり。世間に財を積み

る蔵に鑰なければ開く事かたし。開かざれば蔵の内の財を見ず。……妙とは具の義なり。具とは円満の義なり。……妙とは蘇生の義なり。蘇生と申すはよみがへる義なり。」

以上のご文に用いられた「||」線を施した三つの用語について、

「これらは主に『妙』字が持っている字義に拠ったものであり、『開||相對種開會』『蘇生||變毒為藥||敵對種開會』『具足||十界互具||一念三千』という内実である。」

との見解を示しています。それゆえに、「妙法五字の題目の内実」も、「法華経」そのものや天台の三大部および六大部の所説から抽出されたものであるから、特に宗祖が独自に妙法の内実とされた訳では無いと言えるが、妙法五字の基本的性格としてここで確認しておくことは大切である。」

と、『法華経』や天台大師の『法華玄義』・『法華文句』・『摩訶止観』、妙楽大師の『玄義釈籤』『文句記』『止観弘決』の所説からの抽出であり、宗祖が独自に示された内実ではないと指摘しています。（続く）

《新刊書発刊に寄せて》

『日蓮遺文解題集成』発刊余話 〈その三〉

興風談所 山上弘道

《「第I類 真撰遺文」の

系年変更遺文について》の続き

○〔I 85・正104〕『同生同名御書』

— 〔I 84・正100〕『佐渡御書』と〔I 86

・正101〕『土木殿御返事』との関連

『同生同名御書』は真蹟や上代写本が無く、一四〇〇年代半ば頃に編集された『日朝本録外御書』が初出である。その

写本には宛名と日付が見られず、それは江戸時代初期に刊行された『刊本録外御書』まで同轍であるが、江戸時代後期に編集された『日明目録』にて四条金吾妻宛とされ、系年も文永九年四月とされて以降は、すべての遺文集がそれを踏襲している。

文中「日蓮が大難に値ふことは法道に似たり。」とあって佐渡流罪中であり、また「はかばかしき下人もなきに、かかる乱れたる世に此のとのをつかはされた

る心ざし……」とあって、夫が佐渡の大聖人を訪っていることから、それは四条金吾しか想定されず妥当な見解である。

また日付についても、「かかる乱れたる世」とあるのは、文永九年五月二十五日状『日妙聖人御書』に「去年より謀叛の者国に充滿し、今年二月十一日合戦。其れより今月のすゑにまだ世間安穩ならず。」とある、いわゆる二月騒動による世情不安と考えられるので、それもおよそ妥当といふべきであろう。

しかしその日付は、文永九年四月十日
 状『土木殿御返事』（『定遺』は『富木
 殿御返事』）に「法門の事、先度四条三
 郎左衛門尉殿に書持せしむ。其の書能く
 能く御覧有るべし。」とあることに注目
 すれば、もう少し絞り込むことができる
 のである。

ここに見られる四条金吾に書き持たせ
 た「法門の事」を、天保十三年（一八四
 二）英園院日英が編集した『御書続集』
 が開目抄として以降、『日蓮聖人遺文全
 集講義』（一〇巻五〇頁）等殆んどの解
 説書がそれを踏襲している。それは『種
 種御振舞御書』に「去年の十一月より勘
 へたる開目抄と申す文二巻造りたり。：
 …中務三郎左衛門尉が使ひにとらせ
 ぬ。」とあることによつたのであろうが、
 そこには「使ひにとらせぬ」とあつて四
 条金吾に直接手渡していない。一方『土
 木殿御返事』では四条金吾に直接「書持
 せしむ」としているのであるから、それ

は他の法門書を想定しなければならぬ。
 ではそれは何か。

大聖人は『開目抄』を完成させてから
 一ヶ月ほど経つた三月二十日に、『開目
 抄』に示された不軽菩薩の折伏や転重軽
 受の法門を要約し、さらに二月騒動の惹
 起を、かつて『立正安国論』に予言した
 「自界叛逆難」と位置づけるなど、重要
 な法義をコンパクトに纏められた『佐渡
 御書』を執筆完成させている。そしてそ
 の端書には「此の文は富木殿のかた、三
 郎左衛門殿、大蔵たう（塔）のつじ（辻）十
 郎入道殿等、さじき（棧敷）の尼御前、一
 々に見させ給ふべき人々の御中へな
 り。」とあり、多くの檀越に回覧するよ
 う指示されている。つまり『土木殿御返
 事』にて、「先度四条三郎左衛門尉殿に
 書持せしむ。其の書能く能く御覧有るべ
 し。」といわれた法門書は、この『佐渡
 御書』だったのである。

その辺の状況を整理すると次のように

なるう。文永九年二月大著『開目抄』が
 完成した。丁度その頃四条金吾は、大聖
 人の嚴寒佐渡にてのご生活を心配し、下
 人を遣わし種々の供養を届けた。大聖人
 は出来上がったばかりの『開目抄』をそ
 の下人に託し、四条金吾の許に届けさせ
 た。それを受け取つた四条金吾はその重
 大さを認識し、詳細な指導を仰ぐべく自
 身急ぎ佐渡の大聖人を訪つた。それは三
 月の半ば頃であつたらう。折しも大聖人
 は、鎌倉で惹起した二月騒動の情報を得
 て、その法義的意義と『開目抄』の内容
 をコンパクトに纏めた『佐渡御書』を執
 筆されている最中であつた。数日後の三
 月二十日『佐渡御書』は完成し、帰宅の
 途に立つ四条金吾にそれを託し、富木殿
 等有力檀越に回覧するよう指示するとと
 もに、四条金吾女房への礼状『同生同名
 御書』をも持たせた。それから数日後の
 翌四月上旬に土木殿から供養が届けられ、
 その返状『土木殿御返事』（四月十日

状)にて、先に四条金吾に託した『佐渡御書』を熟読玩味するよう指示された。

以上がおよその流れであるが、そうとすれば『同生同名御書』は、これまでの「文永九年四月」というより、もう少し『佐渡御書』の三月二十日に近づけるべきと思われる。ただし四条金吾が佐渡を出立した日時ははっきりしていないので、『解題集成』では「文永九年三月下旬頃」としたのである。

「第I類 真撰遺文」の

熱原関係遺文について

次にこれは系年変更ではないが、熱原法難関係の遺文で内容変更があったもの、および新加の遺文を幾つか取り上げたい。周知のように大聖人は熱原法難のまっただ中、弘安二年十月一日の『聖人御難事』で「建長五年四月二十八日にこの法門を申し始めてより、二十七年の今本懐

を遂げた」(取意)と仰せられ、また日興上人も、大聖人の絶対的な信任を得ながら、現場にて熱原法華衆と心を一つにして闘ったこの熱原法難を、生涯の誇りとされ大切にされている。

さてその熱原法難関係の遺文で、その内容が一部変更された例を左に紹介しよう。

○「I 308・正342」『伯耆殿御書』と「I 316・

正346」『変毒為薬御書』(『御書全集』は『聖人等御返事』)との錯簡

日興上人は熱原法難の最中に、大聖人より頂戴した御手紙を生涯大切にされ、それは一幅の掛物として北山本門寺に伝来している。それをはじめて翻刻し収録したのは『日蓮聖人御遺文』(『縮刷遺文』)であり、以来『定遺』等の各遺文集に収録されている。

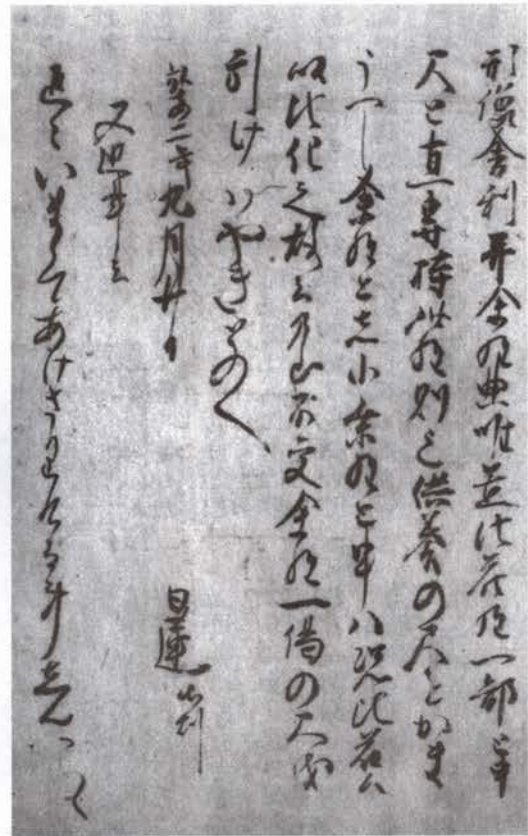
しかしその掛物に収録される遺文の中

には、表装時に文章が錯簡しているものがあることが、大谷吾道師の論攷「日興賜書写本掛物について」(『興風』一一号)によって指摘された。

その錯簡とは、現在『定遺』等が『変毒為薬御書』の末尾に追伸として付けている文章は、本来『伯耆殿御書』の追伸だったのである。さらにその錯簡追伸の前文が掛物にはあることがわかり、その追伸の全貌は以下であることが判明した。

「返々いまゝであげざりける事しんへう／＼。(以下『変毒為薬御書』追伸とされていた文章)この事のぶるならば、此の方にはとがなりと、みな人申すべし。又大進房が落馬あらわるべし。あらはれば、人々ことにおづべし。天の御計らひなり。各々もおづる事なかれ。つよりもてゆかば、定めて子細いできぬとおぼふるなり。今度の使ひにはあわぢ(淡路)房をすべし。」

大谷論文では右文が『変毒為薬御書』



日興上人写『伯耆殿御書』末尾

の追伸でない決定的理由として、『変毒為薬御書』は本文が漢文体であるのに対し、追伸は仮名交じり体であることをあげている。

一方『伯耆殿御書』は本文が仮名交じり体であり、またその末尾に「又追書云」として記されている「返々いまゝであげざりける事しんへう／＼。」の文言と、「この事のぶるならば、……」以下の文言が違和感なく繋がるのである。また『伯耆殿御書』は法華衆が逮捕さ

等がいくら強要してきても、絶対に起請文を書いてはならぬ」と厳命されている起請文かそれに類するものに関することであろうと思われる。この追伸によって、逮捕直前の緊迫した状況がリアルに伝わることとなったのである。

○熱原法難関係の新出遺文

次に最近発見された熱原法難関係の新出遺文をいくつか紹介しよう。

まずは研究誌『日蓮仏教研究』にて「1309・正438等」『伯耆殿並諸人御中御書』のツレかとして紹介される、二編の断簡である。

一つは東京都獅子吼会に所蔵される、「(五)雉のごとし。日秀日弁させる僧にはあらねども浄行一分なり。其上、日々夜々に法華経を転読し、時々刻々に天台六十巻を」

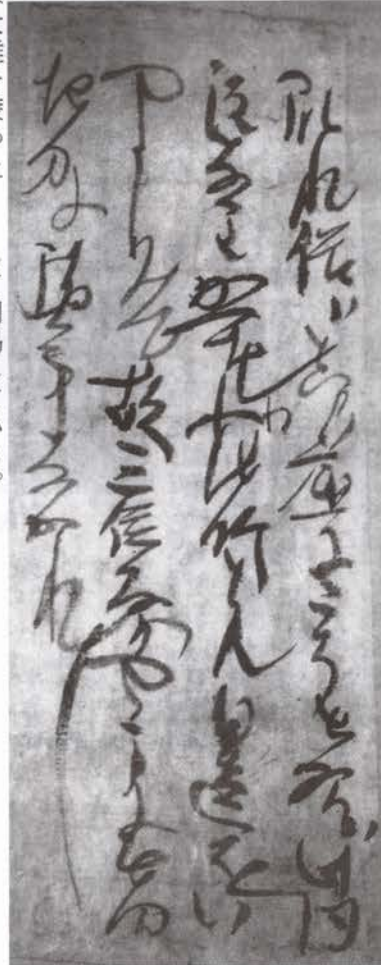
という四行の断簡である。冒頭「五」の丁付けがあり第五紙冒頭部分であることがわかる。熱原法難で滝泉寺を追出させられた日秀・日弁を浄行菩薩の一分であると称讃されている。

『日蓮仏教研究』(二号)で都守基一氏はその図版と翻刻文を紹介した上で、同じく断簡書状である九月二十六日状『伯耆殿並諸人御中御書』のツレの断簡が、近時三編新発見されており、本断簡も内容的に熱原法難に関連していることから、その一部ではないかと推測してい

る。

傾聴すべき見解であるが、右三断簡がツレである根拠として、料紙継ぎ目の裏に日興上人筆の紙数と花押の墨痕が確認されるのに対し、同断簡は今のところそれが実見確認されていないので、『解題集成』（六四〇頁）では、それが確認されるまでの措置として、『浄行一分御書』と命名して別掲している。

二つ目は大阪府堺市法華寺に所蔵される一紙断簡である。冒頭に「九」の丁付けがあり、第九紙たることがわかる。内容は大難を蒙った際に、諸天を大音声をもって叱責したことが示されており、都守氏は『日蓮仏教研究』（三号）で図版と翻刻文を紹介し、『聖人御難事』に「梵釈・日月・四天等さのみ守護せずば、仏前の御誓むなくして、無間大城に墮すべしとをそろしく想



菅野憲道師蔵『故三位房御書』

間、今は各々はげむらむ。」とあるのと同趣旨と見て、これも『伯耆殿並諸人御中御書』のツレの可能性を指摘している。これまた妥当な見解であるが、本断簡も実見の上裏花押が確認されるまでの措置として、『解題集成』（六四一頁）では、都守氏が命名した『大音声御書』と

して別掲している。最後に源立寺菅野憲道師が感得所持される『故三位房御書』を紹介しよう。これは『図録 日蓮聖人の世界』に図版がはじめて紹介された四行断簡書状である。「頭はれ俗は真の底にこそと習ふは此問注なり。かへすがへす、わ法師ども

日蓮をいやしみて故三位房がやうに無間地獄に墮つる事なかれ／＼。」

その内容は、「世俗のことは仏法の底にあるという世間即仏法の法理からしても、この問注（裁判）は妙法流布という仏法上の重事である。貴僧等よ、かくいう日蓮の言葉を軽んじて、故三位房のよ

うに無間地獄に墮ちることなきよう注意せよ。」というもので、故三位房への痛烈な批判は弘安二年十月一日状『聖人御難事』に、裁判のことは同年十月

十二日状『伯耆殿御返事』に見えることから、『解題集成』（六五〇頁）ではその系年を「弘安二年十月頃」と推定し、熱原法難関連遺文として、『故三位房御書』と命名し収録したのである。

【採過拾新録】

反町茂雄著『蒐書家業界業界人』

「かくれた大蔵書家、清野謙次博士」

(昭和五十九年六月十日 八木書店刊より)



清野謙次博士

〈六 恩顧の愛書家を偲んで〉

清野謙次医学博士は、生涯阿堵物に不自由せず、新古とも好きな書物を、自由に購い、心の欲する所に従って、各種の研究に

進み、先史時代の多数の人骨の蒐集と調査で、新しい学域を開拓し、さらに考古学の研究にも歩を進められました。著述には、

いそしみ、それぞれに十分な成果をあげ、数々の立派な著述を残された幸せなお方でした。元来の専攻は病理学で、京都大学の病理学教室の主任教授。夙くドイツに留学し、アシヨフ博士の指導の下に生体染色の研究に精励し、優れた業績をあげられ、若くして学位をとり、「生体染色法の研究」では

前述の外に、『古代人骨の計測に基づける日本人種論』『日本人の研究』『日本貝塚の研究』『日本考古学・人類学史』等々、みなユニークな学的成果を盛った労作でした。

富な蔵書家で、京都時代には、大学の近くの田中関田町の広い邸。洋館の御住宅には、鉄筋コンクリート造り二階建ての、大きな書庫が附属し、一階には日本書、二階に洋書と分類して、膨大な量の御蔵書が備えられてありました。別に病理学教室(大学構内の、別棟の大きな建造物。御自分の費用で建てて、大学に寄贈されたもの、とか聞きました)にも、沢山の御蔵書や、考古学的遺物の数々が置かれてありました。お邸も、学者の邸宅としては非常に広く、千二百坪とかもあり、広大なお庭でした。お父様の勇博士は、東京帝大医学部の第一回の卒業生で、臨床医師の大家として名声高く、大阪で御盛業だったので、沢山の資産を遺されたのだとかいう噂も耳にしました。古典籍は、初めは古版本・古写経などが好きでした。最初に私共へ注文されたのは、昭和十二年の三月、目録の号数で申せば第九号、仏書特輯からだった様に記憶し

て居ります。それまでに私は、このお方はお名前さえ知りませんでしたから、目録は他の人を見られたのでしょうか。御指示は春日版の妙法華経、第七度、願主心性の刊記のある全八巻もの、その他数点でした。心性のは、当時のお金で四百五十円という重価、初めてのお客様からの注文として珍しく多額。突然の新しい有力な華

客の出現に意外の思いをいたしました。お親しくなったのは、その次の第十号発行の時から。これには、広島県尾道市の古寺から出た、春日版成唯識論述記の巻第十を載せて居ります。興福寺内での刊行。平安朝末期、元永二年（一一一九年）僧延観の刊記のある卷子本、新発見の重要資料。正倉院蔵の寛治元年の僧観増の刊記のある、有名な『成唯識論』にすぐ続く古版。

有刊記本としては、すべての古版本中第二位の古さで、重要文化財に指定さるべき重宝。売価は千五百円。第一番の申込みが清野先生、その頃珍しい長距離電話による注文。外の三、四点と合せて二千円近い総額でした。この時は、わざわざ京都まで現物



反町茂雄

を持参し、お宅へお届けしたのでした。以後、目録毎に必ず御注文がありました。今日振り返って考えますと、私共の目録がお好きの様でした。粗末な私の文章を叮嚀に読んで下さって、その上で御手許にある参考書について御自分でお調べの上、すぐ御注文されるらしく、時々私の解説文の批

にお質ねしましたら、「僕も段々年をとるから、少しひまになったら、日本の古典を立派な本で読むつもり。それに、これらは文字が大きいから、老眼でも読み易い」との御返事。「見当たった時に買って置かないと、いざという時に、すぐには手に入らないからね」。なるほど、そう云うものが、と感心しました。

昭和十三年に京都大学を辞して、東京へ移られ、目黒の不動尊の近くにあった御別宅（三、四百坪ほど）で、悠々自適の傍ら、その頃活発に活動していた太平洋学会の顧問をしたり、東京医大の教授をしたりして居られました。相変らず古書はよく買われましたが、新しく日本の人類学・考古学に関する古い資料の蒐集に着手されました。この種の資料は零細なものが多く、従ってために細かく古書店を渉猟したり、油断なく古書目録の中を探索したりする必要がありま

評をなさいました。それからは、昭和三十一年にお亡くなりになる時まで、目録毎に、殆ど間断なく、御愛顧を頂きました。求められるものの範囲も追々と広がって、日本書紀や平家物語の古写本や、萬葉集の古活字版なども買われました。「萬葉集など、お調べになるのですか」と、ぶしつけ

録・撥雲余興の類や、雲根志の類、それに全国の各種の名所図会の類は比較的集め易いが、それら以外の、各地の雑多な写本の

地誌類の蒐集は、たやすくはない。又殆どみな江戸中期以後、特に天明・寛政あたりから後の考古学的な文献、たとえば藤貞幹の好古図巻等の数多くの著述や、木村兼葭堂・木内石亭・穂井田忠友・栗原信充・青柳種信等の、未刊の雑著の何くれを捜索する事は、多年の根気のよい努力を必要とします。これらの雑書を比較的多く取扱う浅倉屋・細川・木内などの書店を、しばしば訪れられました。私共からは『以文会筆記』の原本、兼葭堂蒐集の『諸国板行帖』などを採

られました。以文会は、京都及びその近辺の好古家たちの学会的な集まりで、文化年中から萬延元年頃まで、約半世紀間もつづいた会です。会員には、加茂季鷹・木村兼葭堂・広川獬・間重富・穂井田忠友・冷泉為恭等々の知名人を擁していました。その会の詳細な記録なのです。これまでは不完の写本が一部だけ知られていましたが、これはわずかに二、三冊を欠くのみで三十三冊本。内容豊富、しかも会に保管した原本でした。もと大島雅



反町茂雄著『蒐書家業界業界人』

太郎翁の青谿書屋にあったものです。これを見られた時は、雀躍せんばかりに悦ばれました。初期の考古学の歴史の調査には、非常にお役に立ちました。

『諸国板行帖』は、植物学の伊藤篤太郎博士の遺書の内から見出して、お納めしました。木村兼葭堂の自輯になる珍品、もと

博士の父君伊藤圭介翁が獲得されたものの、圭介翁自らが外箱をつくって、箱書してありました。元来、好古癖と蒐集癖のならびに強い兼葭堂が、日本全国各地の名物・物産の、一枚ものの商標又は広告を拾集してまとめたもの。やや大型の折帖に貼り込んであります。年代は宝暦八年から文化

十三年まで、五十九年にわたり、貼込みの面数は百六十面ほど、原物の枚数はそれに数倍。ドレもみな木版、多く彩色刷。大小・内容・体裁とも区々で、この間の諸国名産の食物・調味料・薬品・香料・文房具・化粧品・小間物・袋物、その他百般の商品の記事が収められて、物産・民俗資料として比類の少ない珍品。詳しくは、博士の『日本考古学・人類学史』の詳細な記述に譲りますが、価格も随分と高額でした。しかし、そんな事には無頓着で、『板行帖』は随分役に立った」と、しばしば語られました。人種学の資料として、異国人物図説の類も、見当たり次第に蒐集され、この種の奈良絵本絵巻の精巧珍貴のものにも、出費を厭われませんでした。田安家旧蔵の『山海異形』という、濃彩絢美の四冊本を買われた時には、一見荒唐無稽のこの種の画集が、果して学問の役に立つのだろうか、と怪しみました。御著書の中には、『本草綱目』の記事と比較しての考証が、ちゃんと物されてありました。

戦災の時には、目黒辺は全部焼けましたので、御住宅は全焼しましたが、早く手配をして、堅固な大きな防空地下室を設備

してありましたから、歴大な量の書物や考古学参考品は、みな無事に残りました。間もなく、茨城県土浦市の郊外の木原村に疎開され、蔵書のかなりの部分は東京に預け、その他は木原に移動され、折柄食料の不足時代でしたから、六、七年間そこに隠棲されました。戦後の経済界の大変動で、恐らく御資産の上では、大きな痛手を受けられたであろうと想像されますが、この間も資料の蒐集は、怠りなく続けられました。隠棲中も、調査・研究は休みなく継続されたのでしよう。その成果は「日本考古学・人類学史」上下二巻として、昭和二十九年・三十年に上梓。発行所は岩波書店、A5判千五百頁に余る大作でした。

天理図書館が購入しました。これはユニークのコレクションです。

この間に、歴大な蒐集品の整理にも着手されました。御蔵書中、人類学・考古学関係の洋書は、一括して東大へ納まりました。名古屋に新設の南山大学へも、かなりの数量のものを、一括譲渡されましたが、その内容は聞きもしました。人類学・考古学に参考の物品資料は、天理の中山正善さんが大部分を引き受けられ、いまは天理参考館に納められてあります。人類学・考古学関係の写本、版本類は、ソックリまとめて、

昭和二十八年かに、目黒の焼け跡に瀟洒な洋館を新築して、東京に引き移られました。その際、まだ書物が非常に多くて、到底新宅の書庫に入り切らぬので、不急不要な普通図書を、トラックに軽く一杯ほど、入札会に出して処分され、手許には古典籍類と、手近に必要な二、三千冊の一般古書だけを留められました。その後、古版本・古写経等の若干を、私からお願ひして、御割愛願った事も二、三度ありました。

昭和三十一年一月に、心臓麻痺で急逝されました。庫には古書が非常に多く残り、中に稀覯本も豊富でした。私がお預かりして、同年中に、二回にわたって入札売立をし、その総額は当時のお金で五百万円を超えました。その内容については、又別の機会に詳述を期して居ります。

はじめから終りまで、特別に厚い御信用を頂き、御愛顧を受けました。書物その他の蔵品については、戦後には、特に晩年には、執着が淡かった様で、多年の御蒐集のものを、惜しみなく手放されました。買われる時もお気軽に、多分のお金を投じられ

ましたが、売る時もお気軽に、明るいお顔でした。自分は十分に使ってしまったものだから、というお気持だったのかも知れません。

反町茂雄（そりまちしげお）

一九〇一—一九九一 昭和時代の書誌学者、古書籍商。

明治三十四年八月二十八日生まれ。昭和二年、東京神田の古書店・一誠堂書店に東京帝大の店員としてはいる。

七年、店舗をもたない目録販売の古書肆・弘文荘を設立する。埋もれた古典籍の目ききとして知られ、松尾芭蕉の「貝おほひ」、「為家本土佐日記」などを発掘した。

平成三年九月四日死去。九十歳。新潟県出身。著作に「日本の古典籍」「一古書肆の思い出」など。

【格言など】借金はすまい、人は傭うまい、安い本・平凡な本は扱うまい（弘文荘の営業方針）



現在の浜寺公園

【所感】

大久保利通の顕彰碑に思う

大阪地区 森 秀之

私が現在住んでいる高石市の高師浜は、明治維新頃までは数里に渡る白浜と松の名勝だったようです。織豊時代までは住吉あたりからこの地区までは紀州街道でも「岸の辺の道」といわれた白砂青松の景勝地でした。古くは万葉集で有名な紀貫之や藤原定家なども、この美しい景勝地を眺め、和歌を残している場所です。このように歴史的に由緒ある地域であるとは知っていました。

「兄弟抄」の、「一生が間賢なりしも一言に身をほろぼす」というたとえ話の結文の一節が目にとまったのを機に、忍辱の鍛錬をと思い、自行して唱題行と身体の訓練に日々ジョギングを始めたので

すが、同じコースを走るのではなくて、色々コースを変えて走ってみると、地元の旧跡が今まで以上に目に付くようになりました。その中で、明治の元勳大久保利通の歌碑が浜寺公園にあるのに興味を引かれました。

以前から、その存在は知ってはいましたが、どういう経緯でそこに建てられたのか、といったことまでは興味が無かったのですが、今年の一月中旬に、たまたま千早赤阪村に水仙を見に訪れた時に、「くすのきまつり」というのが開催されていて、そこに大久保利通揮毫の楠公生誕地の碑が建っていたのを見て、浜寺公園の歌碑のことを思い出し、興味を覚えましたので、少し調べてみました。

百人一首（七十二番）に、

『音にきく 高師の浜の あだ波は

かけじや袖の めれもこそすれ』

との有名な歌がありますが、作者の祐子内親王家紀伊は、平安時代後期の歌人で、「女房三十六歌仙」の一人です。

明治六年に、大久保利通は案内されて

浜寺を訪れたのですが、その時、浜寺にもともと二千本以上もあった松の木は、半数以上が伐採されていたことを知り、



大久保利通



浜寺公園にある大久保利通の歌碑

当時の堺県令・税所^{さいしよあつし}篤に伐採するわけを尋ねると、税所が、「近き頃士族授産のため（この土地の当時の持ち主は、田安家いわゆる徳川家です。）その士族の授産にて、払い下げたるなり」と応えて、利通は、住宅地として開発しようとするのを知り、『このつかさともあるものの心なし』（大阪を管理している者として思いなし）かと、

「音に聞く、高師の浜のはままつも世のあだ波はのがれざりけり」と開発に反対する歌を詠んだといわれ、税所は、大久保に、

「いかにせん高嶺をろしのはけしきに
なみたふるひしをのえそこれ」と返歌を詠んで、伐採の停止を命じ、この浜寺を公園にするため、太政官に申し出て、明治六年十二月に許可されたというのが、この顕彰碑の内容とのことでした。

一方、もう一つの千早赤阪村の楠木正



左：楠公誕生地を示す石碑



右：ちょうど開催されていた「くすのきまつり」(千早赤阪村)

成公生誕地については、私が出掛けていた時に、ちょうど「くすのきまつり」

というのが催されていて、落語会のイベントが催されたり、郷土資料館が無料開放されていて、資料館では郷土史家から展示物や楠木正成公の説明を聞くことができました。

大久保利通の話から、楠公が歴史に登場する僅か五年間で大忠臣と称えられるのは、水戸黄門で有名な徳川光圀公が尽力した「大日本史」編纂の影響が大きい、との説明には興味を引かれました。

もう一点、千早赤阪村には、赤坂・千早の合戦（一三三一年〜一三三三年）で戦死した鎌倉方の人々を弔う為に建てられたと伝える五輪塔（寄手塚）があります。地元の人がこの塚に「敵」という字を用いず、「寄手」として、「見方塚」より「寄手塚」の方が大きいことを挙げて、楠公の奥ゆかしさをと伝えていますが、石塔は時代考証的には戦国期の物で、二百年以上後年の作成のようで、自分が描いていた楠公像のイメージが冷める思いがしますが、真実を知ることの方が大事であると実感します。

また、大久保利通が明治八年に訪れ、

楠公生誕地に立ち寄った記録が残されています。

「大久保の日記には、二月八日に会議の合間をぬって、大阪府千早赤阪村にある楠木正成の生誕地を訪れたと記されている。大久保はその時、正成の史跡のあり様に愕然とし、同行した堺県令（県の長官）の税所篤らに向かつてこう言ったと、『大楠公奮忠事歴』（大正四年発行）は伝える。

『吾等同志の者が、尊王倒幕の大義を唱へ、身を捨て家を忘れ東奔西走して天下を動し、遂に明治維新王政復古の御代を開きしは、皆是れ大楠公の遺志を継承して、君国のために臣節を淬励した（略）。然るに今親しく楠公の遺蹟を訪へば、実に此有様である』

浜寺を訪れた時は、明治六年の征韓論問題の大変忙しい時期で、楠公生誕地訪問は、明治八年の「大阪会議」で、今後の政府の方針（立憲政治の樹立）および参議就任等の案件について協議した会議の時です。ここにも堺県令税所篤（元薩摩藩士）が登場します。私はこちらの方

にも興味が引かれます。（西郷隆盛、大久保利通、税所篤は薩摩の三傑といわれる）

リアリストといわれた大久保利通という人の、教養、素養、政治家としての凄さ、国士としての美談を否定する気は毛頭ありませんし、私の穿った推測なのですが、浜寺公園の松の木伐採停止については、田安家（徳川家）がすでに進めていたのではないかと感じるのです。

楠公生誕地再興は、楠公という歴史的に有名な大忠臣を顕彰することで、天皇制への忠臣を喧伝し、大阪会議（出席者は木戸孝允、板垣退助）において課題を優位に進める政治家としてのパフォーマンスだったのではないかと感じたりもするからです。

それはそれとして、何気ない歌碑にも色々な経緯、顕彰する人の志や思惑を感じたりもしますが、その縁でそれぞれが色々と考えたり思うことも、大変大きなことなのではないかと、改めて感じました。

恵日だより

案内お知らせ

◆能登半島大震災義援金報告

本年元日に起きた能登半島大震災に際し、源立寺法華講の役員新年互礼会の会費二十三名分（二三〇〇〇円）を、源立寺有志として、「石川福祉法人石川県共同募金会」主催の「石川県共募令和六年能登半島地震災害義援金」名義の口座に振り込みましたことをご報告します。

なお、手数料免除を受けるため、直接の振り込みは、個人名義口座から振り込



本堂に設置されたAED

【卯月詠草】

狂ひ咲く 矢車草に 振り向ける

道行く人の眼やさしき

寮に居る 娘より電話の 掛かるかと

湯に入る時間も 遅らせて待つ

〔和風〕

【恵日俳壇】

春暮るる 咳しほく父とガラス越し

雨久し畑打つ音の乾きけり

黄に埋もれ菜の花畑妻を撮る

菜の花の黄色を見たくて歓喜する

菜の花に埋もれてピースVサイン

母の忌や萍は夜を深めける

声出してひとりの刻や盆の風

〔農婦〕

〔森秀之〕

〔故吉田裕〕



みましたのでご了承下さい。（森秀之）

◆AED設置のお知らせ

この度、源立寺本堂窓側後方に、AED（自動体外式除細動器）を設置しました。

今の時代、いつ緊急事態が生ずるか分かりませんので、いざという時に活用できるよう、講員の皆様にはAEDの設置場所を、予め確認していただきませうようお願いいたします。

また、次でに消火器の設置場所もご確認をお願いいたします。

◆書籍配布のご案内◆

(1)「観心本尊抄」(現代語訳対訳・注解)

今年のお講の課題御書の「観心本尊抄」のテキストを、無償で贈呈しています。

(2)「妙法蓮華経並びに開結二経」

(現代語訳対訳)

法華経を現代語で読みたい方に、無償で贈呈しています。

※(1)(2)は、(一世帯一部。法華講員のみ)の配布です。在庫がなくなり次第終了しますので、お早めにお申し出

第五十二回源立寺法華講総会のご案内

法華講の皆様にはご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、左記の通り第五十二回源立寺法華講総会が開催されます。

また、総会後に、源立寺新菩提寺建立護持会の報告があります。

講中の皆さまには万障お繰り合わせの上、御参詣・ご出席下さるようご案内いたします。

記

日時 五月十二日(日) 午後一時～三時三十分

会場 源立寺本堂

講演 興風談所 山上弘道尊師

源立寺

下さい。

(3)「いのち炎やさむ」

奥はつさんの「いのち炎やさむ」は、以前に配布をしていますが、好評につき増刷しました。必要な方は、受付でお受け取り下さい。

祝 初参り

・尼崎市 山本桔平くん

(令和五年十一月二日生)

この度、右の方が初参りで、御授戒をお受けになりました。おめでとございます。



山本さんご一家

四月の行事

一日(月) 午後二時 お経日

七日(日) 午前九時 講中勤行会・幹事会

午前十一時半 法華講入講式

十三日(土) 午後一時 お講・役員会

※五月号の継命・恵日発送(4月末)は、

『兵庫』地区が担当です。

六月号の継命・恵日発送(5月末)は、

『槻木』地区が担当です。

◆恵日ホームページ活用を◆

『恵日』のホームページが開設されています。

このホームページでは、『恵日』創刊(平成七年三月号)から現在に到るまでの全号が、年代別に分類・収録されており、いつでも自由に閲覧できます。

また、菅野ご住職の著書・著作や、正信覚醒運動に関する重要な諸資料等も多数収録されていますので、講員各位におかれましては、ぜひともホームページをご活用いただきますよう、ご案内いたします。

恵日ホームページのアドレスは左の通りです。

<https://the-enichi.co/>

恵日

令和六年四月号 通巻三五一号

令和六年四月一日発行

編集兼
発行人

菅野 憲道

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内

〒(〇七二)七五一一三三五

E-Mail kanno@wombat.zaq.ne.jp

購読料(含送料)年間二〇〇〇円

加入者名 恵日編集室会計

〒振替 口座番号 0138012112649